

2015年度④

史跡古津八幡山 弥生の丘展示館 平成 27 年度企画展 4

邪馬台国の時代 2

縄文のある弥生土器 ―新潟県北部（阿賀北）の世界―
解説パンフレット

会期 2016 年 1 月 5 日～3 月 27 日

企画展の開催にあたって

弥生時代中期後半、新潟県北部（阿賀北）では秋田系（宇津ノ台式系）・北陸系（小松式系）・会津系（川原町口式系）の 3 系統の土器と、長野系（栗林式系）や各系統の要素を併せ持った折衷土器が使われていました。水田や畠はまだ発見されていないものの、米や雑穀等の炭化種子や収獲用の石器が見つかったことから既に農耕を行っていたものと考えられます。

ところが、弥生時代後期になると縄文のある東北系（天王山式系）土器に統一されます。縄文のない北陸系土器があるものの、新潟県北部（阿賀北）ではその比率が僅かとなってしまいます。中期後半に行われていた農耕の痕跡もわからなくなります。また、中期後半と同じように低地に造られた集落がある一方で、山元遺跡のように丘陵上に造られた高地性環濠集落も出現します。古津八幡山遺跡と比べて、環濠の形や規模、住居の形や構造等が異なりますし、使われていた土器も縄文のある東北系土器が大半です。

古津八幡山遺跡の頃の新潟県北部（阿賀北）はどのような社会だったのか。古津八幡山遺跡との類似点・相違点は何か？今回の企画展 4 では邪馬台国の頃の新潟県北部（阿賀北）の様相を探ります。



狐塚遺跡 阿賀野市熊居新田字狐塚

遺跡は阿賀野川右岸の沖積地上に立地し、標高は約 11.7～12.3 m である。発掘調査は、一般国道 49 号阿賀野バイパス建設に伴い、現（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団によって 2007 年に行われた。上層・下層の 2 面の生活面があり、上層からは中世の遺構・遺物が、下層からは弥生時代中期後半の遺構・遺物が見つかった。

弥生時代の遺構には、土坑墓 11 基、土器集中区 3 か所、性格不明遺構 1 基がある。土坑墓は、9×15m 程の範囲に集中して造られており、土坑底面から浮いた状態で小形土器が 1～4 個体出土している。土坑のプラン（平面形）は極めてわかりにくく、土器がある

程度まとまって出土したことにより土坑として認識することができたものが多い。

弥生土器は遺存率の高い 31 点が出土しており、このうちの小形土器には副葬・祭式用として作られた土器を含むと考えられる。土器は多系統のものがあり、秋田系（宇津ノ台式）14 点を中心に、北陸系（小松式）6 点、会津系（川原町口式）4 点、長野系（栗林式）1 点、秋田系と北陸系の折衷土器 6 点等があり、各地域の要素が見られる折衷的な土器が多い。また、石器が全く出土していないことも特筆される。



道端遺跡 村上市南新保字道端

遺跡は海岸砂丘と丘陵に挟まれた沖積地上に立地する。標高は 2～3 m 程度である。発掘調査は、日本海沿岸東北自動車道建設に伴い現（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団によって（2001・2002・2004・2005 年）、新潟山形南部連絡道路（国道 113 号線）建設に伴い旧荒川町教育員会によって（2002～2004 年）行われた。縄文～古墳時代・古代・中世の複合遺跡であり、弥生時代は中期後半を中心に営まれた集落である。

2005 年の発掘調査では、河川跡に隣接して平地式建物 7 棟、竪穴建物 3 棟、周溝遺構 4 基、土坑・溝などの弥生時代の遺構が検出された。平地式建物・竪穴建物とされた遺構は壁溝を持ち、炉・柱穴等から建物と認定されたものであるが、平面形は隅丸方形・隅丸長方形・楕円形等様々である。周溝遺構のうち 2 基からは埋葬施設の可能性がある土坑が見つかっており、方形周溝墓と考えられている。



弥生土器は中期後半が中心で、北陸系（小松式）を主体に秋田系（宇津ノ台式）が見られるが、会津系（川原町口式）はほとんど見られない。また、仙台平野の高田 B 式もしくは中在家南式と考えられる甕や、磨消縄文のある中期中葉の土器も出土しているが、遺構出土遺物は小破片が多く、所属時期を決めることが難しい。

土器以外には石鏃・大形石庖丁・大形直縁刃石器・扁平片刃石斧・環状石斧等の石器、管玉等の石製品が見つかった。このうち、大形石庖丁と大形直縁刃石器は、使用痕分析により除草やイネの残稈や根刈り具としての機能が推測されている。

本遺跡からは粃痕土器や、炉・土坑内から炭化したイネ・アワ・ヒエも検出されており、近くで水稻耕作や雑穀栽培が行なわれていたものと考えられる。

阿賀野川以北にありながら、北陸系（小松式）土器が主体の土器様相からみて、北陸系の集団の移住や水稻耕作の導入の可能性が指摘できる重要な遺跡である。

山草荷遺跡 新発田市草荷

遺跡は加治川右岸、海岸線から約 5 km 内陸の砂丘列上（新砂丘 I-1）に立地する。この砂丘の後背地には紫雲寺潟を含む潟湖群が発達していた。発掘調査は八幡一郎氏・大木金平氏によって 1935 年に行われた。多数の弥生土器が完形品で発見され、「山草荷式」（1936 年）、「越後 A 様式」（1938 年）、北陸地方 2「第 II 様式」（1968 年）とされた中期後半の標識遺跡である。遺構については不明であるが、壺の比率が高く、完形率も高いことから埋葬に関する遺跡と推察されている。また底部に布目痕を残すものが多いことも注目される。中期のみで後期東北系（天王山式）が全く出土していない点も重要。

土器は大形壺を主体に、小形壺・蓋・甕・小形鉢等があり、会津

系（川原町口式）・秋田系（宇津ノ台式）・北陸系（小松式）の 3 系統の土器群からなり、長野系（栗林式）が少量見られる。宇津ノ台式土器は、平口縁が多いこと、体部上半の文様が重菱形文の他に小松式の影響を受けた櫛描波状文が多用されること、口縁部内面の施文率が高いことが特徴である。各系統の各器種が見られるが、川原町口式の大形壺と宇津ノ台式の甕が主要器種と言えよう。土器以外の石器等の遺物については不詳である。



王子山遺跡 新発田市小川

遺跡は日本海沿岸から内陸に 4.5km ほどの砂丘上（新砂丘 I-1）に立地する。標高は 5.2～5.8m である。同一砂丘上にある山草荷遺跡の北東 1 km に位置する。発掘調査は、紫雲寺地区の県営圃場整備事業に伴い、新発田市教育委員会によって 2005 年に行われた。砂丘上は削平され遺構は検出されなかったが、砂丘斜面から縄文時代～中世の遺物や古墳時代・古代・中世の遺構が見つかった。

弥生時代の遺物は、前期～中期初頭、中期後半～後期の土器があるが、中期中葉は見られない。中期後半の土器には北陸系（小松式）、会津系（川原町口式）、秋田系（宇津ノ台式）、折衷土器などがあり、近接する山草荷遺跡とよく似た状況を示している。また、山草荷遺跡では後期まで続かないが、本遺跡では後期天王山式土器が一定量出土しているが、重菱形文の構図となるものがほとんどなく、中期後半との間には空白期があると考えられる。石器には、石鏃・石錐・楔形石器・磨製石斧・多頭石斧などがある。

弥生時代中期後半は多系統の土器群があるが、後期になると東北系の天王山式の一群にまとまる状況が見られる。

中曽根遺跡 村上市金屋字中曽根

遺跡は砂丘列背後の後背湿地内の微高地に立地し、標高は約 3.4 m である。発掘調査は、日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い、現（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団によって 2005・2006 年に行われた。弥生時代後期と古代の集落からなる複合遺跡である。

検出された弥生時代の遺構は住居 2 棟、土坑 1 基、土器集中部 3 か所である。住居と土坑は調査区の北側の微高地から、土器集中部は調査区南側で見つかった。

住居は 2 棟とも竪穴式であるか平地式であるかは不明であり、壁溝も検出されていない。SI40 は弥生土器が出土し、その周辺から炉跡や柱穴を検出したことから住居跡と認定されており、平面形は楕円形と推定されている。SI41 も弥生土器・磨製石斧が出土し、周辺から炉跡が検出されたことから住居と認定され、平面形は長楕円形と推定されている。



弥生時代の遺物は、土器と石鏃や磨製石斧などの石器がある。土器は東北系の天王山式が主体で北陸系土器を全く伴わないようだ。

本遺跡は小規模ではあるが、沖積地に立地する弥生時代後期の遺跡として注目される。

砂山遺跡 村上市八日市字砂山

遺跡は現在の荒川の右岸側にあり、海岸砂丘の内陸側斜面に立地し、旧岩船潟西岸に所在する。標高は 14～15m である。昭和 30 年代後半からの砂採取の際、包含層の一部が切り崩され、遺物が出土したことにより遺跡が発見された。発掘調査は、新潟大学の小片保氏を中心として、上原甲子郎氏らの協力により 1967 年に行われた。正式報告がなく正確な調査位置・遺構の有無は不明であるが、5

m の厚さで堆積した砂を取り除くと、0.3m～0.5m の厚さの黒砂の遺物包含層が確認され、縄文～古墳時代の遺物が出土したとされている。弥生時代中期後半～後期の遺物が主体であり、東北系土器（天王山式）が、『日本原始美術 1』（1964）、『弥生式土器集成本編 1』（1968）に「上ノ山遺跡」・「砂山遺跡」として掲載され、県北の弥生時代の遺跡として著名である。土器以外には、有茎石鏃・アメリカ式石鏃などの石器、メノウ製の細形管玉、土製円盤なども確認されている。また、縄文時代晩期の長野系土器（氷 I 式）等希少なものも見つかっている。

近年、遺物が報告され、弥生土器は砂山 1 群～5 群に細分され、そのうち 3 群・4 群は弥生時代後期天王山式の日本海側の地方型式「砂山式」として設定された。

松影 A 遺跡 新潟市北区笠柳字郷海老

遺跡は阿賀野川下流右岸の砂丘上（新砂丘 I-3）に立地する。現標高は約 1.5m 前後であるが、かつては松影遺跡（A～E）全体で、標高 3～10m 程あった。発掘調査は、日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い、現（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団によって 1997・1999 年に行われた。縄文～古墳時代・古代・中世の遺物が確認されている。

弥生時代の遺構としては、土坑 1 基とピット 1 基がある。弥生時代の遺物の大半は包含層出土で、中期後半の土器が 3 点あるほかは、後期の東北系土器が主体である。古津八幡山 1・2 期を主に、4・5 期の土器が数点混じる。後期の北陸系土器は1・2 期である。

これらは、広義の天王山式に属するが、内外面にハケメを多用し、縄文が単節 LR もしくは短軸絡条体 R（撚糸文）が目立つこと、口縁端部に施文するものが多いこと、文様は連弧文よりも重菱形文が多いことなど、北陸地域の天王山式の特徴を示している。また、内湾口縁など器形は天王山式でハケメ調整をする所謂折衷土器も見られる。土器以外には大形尖頭器・石鏃・磨製石斧・凹石等の石器がある。

堂の前遺跡 村上市下新保字高田

遺跡は三面川左岸に広がる沖積地の微高地上に立地し、標高は 15.4～16.0m である。発掘調査は、日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、現（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団によって 2008 年に行われた。

弥生時代の遺構は、竪穴住居 1 棟、竪穴住居とは認定しがたいとされた性格不明遺構 6 基、掘立柱建物 3 棟や溝状遺構、自然流路等がある。

竪穴住居（SI318）は、平面楕円形で壁溝が巡り、規模は長径 5.45 m、短径 4.53m である。炉跡が中央にあり、支柱穴が 3 基確認され、土器・砥石・鑿形鉄器等が出土した。



弥生土器は、中期後半の秋田系（宇津ノ台式）、後期の東北系（天王山式）が主体で、北陸系など他系統の土器群は伴わない。外面に刳痕のある土器が 1 点ある。土器以外には石鏃・石錐・石匙・砥石などの石器、鑿形鉄器、ガラス小玉等が見つかっている。

堂の前遺跡は、川辺に営まれた弥生時代中期後半～後期にかけての集落遺跡であり、特に県北部の平野部で弥生時代後期の竪穴住居が検出されたことで注目される。また、天王山式期の竪穴住居から鉄器が出土したことも特筆される。

山元遺跡 村上市下助瀧字山元

遺跡は越後平野北端の丘陵上に立地し、旧岩船潟の縁辺にあたり、標高は約 40m である。日本海沿岸東北自動車道建設に先立つ試掘調査で発見された日本海側最北の高地性環濠集落である。発掘調査

は、現（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団によって 2005・2006・2008 年に、村上市教育委員会によって 2009～2011 年に行われた。

遺跡は、環濠に囲まれた B 地点（居住域）と、谷を挟んだ北側の尾根上に広がる A 地点（墓域）に分かれる。検出された遺構は、A 地点では土坑墓 18 基・埋設土器 4 基、B 地点では竪穴住居 1 棟・掘立柱建物 1 棟や環濠などである。

A 地点の土坑墓は、平面形は小判形を呈するものが多く、10 基以上が東西方向を主軸としている。1 号土坑からはガラス小玉の完形品 68 点・破損品 4 点、石鏃 5 点、筒形銅製品が出土し、土坑上面から剥片類がまとまって出土した。他の土坑は未調査のものが多く詳細は不明であるが、遺構確認面で剥片類がばらまかれたような状態で見ついている。埋設土器は天王山式の精製小形甕を用いたもの 1 基、粗製壺を用いたもの 3 基があり、逆位や甕を用いた合わせ口など形態も様々で、小形鉄剣や石鏃が内部から見つかっている。



B 地点の環濠は、6 か所で途切れ、2 か所で重複している。1 重が基本であるが、北側は 2 重、東側は 3 重になっており、尾根を分断する縦堀が 2 条ある。途切れる部分が多い点は古津八幡山遺跡と類似するが、環濠の規模は大きい所でも幅約 2 m、深さが 1 m



程度で、県内の他遺跡と比べても、極めて小規模な環濠と言える。

竪穴住居は、尾根より若干下がったところで検出され、谷側は流失していたが平面形は小判形で長径 6.3m、短径 4.5m と推測されており、中央付近に炉が見られる。掘立柱建物は柱穴 4 基で構成され、長軸 3.6m、短軸 3.0m・3.36m のややいびつな形である。

出土した土器は、中期後半の秋田系（宇津ノ台式）、会津系（川原町口式）が定量見られるが数は少なく、北陸系（小松式）も目立たない。主体となるものは、後期の東北系（天王山式）で、同期の北陸系・北海道系（続縄文式）土器が若干伴う。土器以外にも石器・石製品、上記の筒形銅製品・小形鉄剣、ガラス小玉がある。



日本海側最北の高地性環濠集落であり、かつ東北系土器分布圏内で環濠集落が存在したことを示す重要な遺跡である。環濠は古津八幡山 1 期と同時期の後期初頭に掘削されるが、古津八幡山 2 期で埋没し、古津八幡山 3・4 期までは存続しないものと考えられる。

滝ノ前遺跡 村上市岩ヶ崎

遺跡は日本海に臨む三面川河口の右岸に形成された段丘上に立地し、標高は 42m である。県道村上温海線建設に伴い遺跡が発見され、発掘調査は、村上市教育委員会によって 1971 年に行われた。調査により縄文～古墳時代の遺構・遺物が確認されている。

弥生時代の遺構は竪穴住居が 3 棟（1～3 号住居）である。1 号住居は全体の 1/3 程度しか残存していないが、2・3 号住居は良好な状態で検出された。平面形はいずれも円形で壁溝があり、規模は直径 5～5.5m 程度である。また、2 号住居の中央には炉が認められた。天王山式期の円形の竪穴住居として著名である。



弥生土器は、中期中葉の宮城系（杵形囲式）、中期後半の北陸系（小松式）、長野系（栗林式の折衷）も若干あるが、後期後半が主

体である。後期後半は概ね古津八幡山 2～4 期頃であるが、5 期以降の北陸系も見られる。東北系が主体ではあるものの、阿賀野川以北の弥生時代後期の遺跡の中では突出して北陸系土器の比率が高く、ランドマークのような場所に立地した遺跡の特性をよく示しているといえる。

竪穴住居に伴う土器は、1 号住居床面からは東北系、覆土からは北陸系の土器が主体的に出土した（古津八幡山 2 期）。2 号住居では北陸系が主体（古津八幡山 3 期）で、3 号住居は東北系が主体であるが北陸系も定量出土している（古津八幡山 2～4 期？）。

弥生時代の遺物は、土器のほかにもアメリカ式石鏃などの石器、土錘などの土製品がある。

狐森 B 遺跡 新発田市小戸字上平

遺跡は新発田市街地から南東に約 8 km の内陸部に位置する。加治川右岸から約 300m 離れた河岸段丘上に立地し、標高は約 65m である。発掘調査は、県営圃場整備事業（加治川右岸地区）に伴い新発田市教育委員会によって 2007 年に行われた。開墾時の攪乱により、遺跡の遺存状態は良いとは言えないが、縄文時代・弥生時代後期と後期終末～古墳時代早期の遺構・遺物が見つかっている。なお、基盤層は砂礫層である。

弥生時代後期と後期終末～古墳時代早期の遺構は土坑が 2 基検出されている。このうち 6 号土坑は規模が長軸 2.3m、短軸 2.08m、深さ 0.15m の円形を呈する。この土坑の下には長軸 1.58m、短軸 0.42m、深さ 0.15～0.2m の東西に長い溝状の構造が検出された。この下部構造の西端から、後期終末～古墳時代早期の天王山式系の附加条縄文の施された甕と、北陸系の広口壺の大きな破片が重なり合う状態で出土した。下部構造の片端で遺物が重なり合って出土した状況から、墓の可能性が指摘されている。



遺跡の立地場所が、加治川・阿賀野川を介して会津盆地と地理的に近いことから注目される。

兵衛遺跡・四ツ持遺跡 胎内市宮川字四ツ持・兵の衛

兵衛遺跡は胎内川左岸から南に約 7 km、この兵衛遺跡から 2.5km 北方に四ツ持遺跡が位置し、両遺跡とも砂丘内陸側の張り出し部分に立地する。標高は兵衛遺跡が 3.5m 前後、四ツ持遺跡が 4.5m 前後である。発掘調査は圃場整備関連の湛水防除事業に伴い、旧中条町教育委員会によって 1996 年に行われた。両遺跡では複数の時代の遺構・遺物が見つかっているが、弥生時代後期の東北系土器（天王山式）と共に北海道～東北北部に由来する続縄文土器（後北 C 1 式後半～C 2・D 式前半）が出土している点が注目される。

兵衛遺跡 弥生土器は、中期後半は北陸系（小松式）・秋田系（宇津ノ台式）、後期は東北系（砂山 1 式・天王山式）、在地系（八幡山式）、続縄文土器があるが、北陸系ははっきりしない。土器以外には石鏃・スクレーパー、黒曜石製の両極石器等の石器がある。

四ツ持遺跡 遺構としては弥生土器の出土した土坑があるが明確ではない。中期後半～後期の弥生土器があり、後期の北陸系土器が一定量見られる。土器以外には石鏃等がある。両遺跡とも住居跡は見つかっておらず、短期間のキャンプ地のような性格だったと考えられる。

終わりに

弥生時代中期後半には、狐塚遺跡や王子山遺跡の複雑な土器様相を見てわかるように、新潟県北部（阿賀北）では秋田系（宇津ノ台式系）・北陸系（小松式系）・会津系（川原町口式系）の 3 系統の土器が使われていました。また、北陸系の「櫛描文」手法で、秋田系

の構図である重菱形文を施文したり、秋田系の器形に「櫛描文」手法で波状文や鋸歯文を施文した折衷土器が多く見られることが特徴です。日本海を介して北陸と秋田・会津を繋いでいたのが主に阿賀北の海岸部から砂丘地帯や、舟に乗って行くことのできる内水面地帯でした。このような社会情勢の中から、後期になると各系統の要素を取り入れた日本海側の天王山式系土器として「砂山式」が成立します。

阿賀北では、遅くとも中期後半には北陸系土器とともに農耕がもたらされます。しかし、後期になると縄文のある東北系土器（天王山式系）が主体となり、北陸系が少なくなるとともに、農耕の痕跡が見られなくなります。一方で、今回の展示では示していませんが、後期になると富山県や石川県など北陸でも天王山系土器が出土するようになります。

中期後半には北陸と秋田の人々が阿賀北で交流をしていたのが、後期になると阿賀北の人々が北陸へ出向いて交流をするようになったと考えられます。兵衛遺跡や四ツ持遺跡の続縄文式土器は秋田以北からもたらされたものですが、阿賀北に持ち帰った北陸の物産を求めてやってきたと推察されます。山元遺跡で見つかったガラス玉や鉄器などは北陸との交流でもたらされた物産と考えられます。有機質で残らないので断定的なことは言えませんが、米や毛皮などの物々交換の対象物だったのではないのでしょうか。

北陸系土器が主体になり、この地域の社会が大きく変化するのは、古津八幡山遺跡が廃絶される古墳時代早期（八幡山 5 期）以降のことです。

本企画展の開催にあたって、下記の機関等よりご協力いただきました。

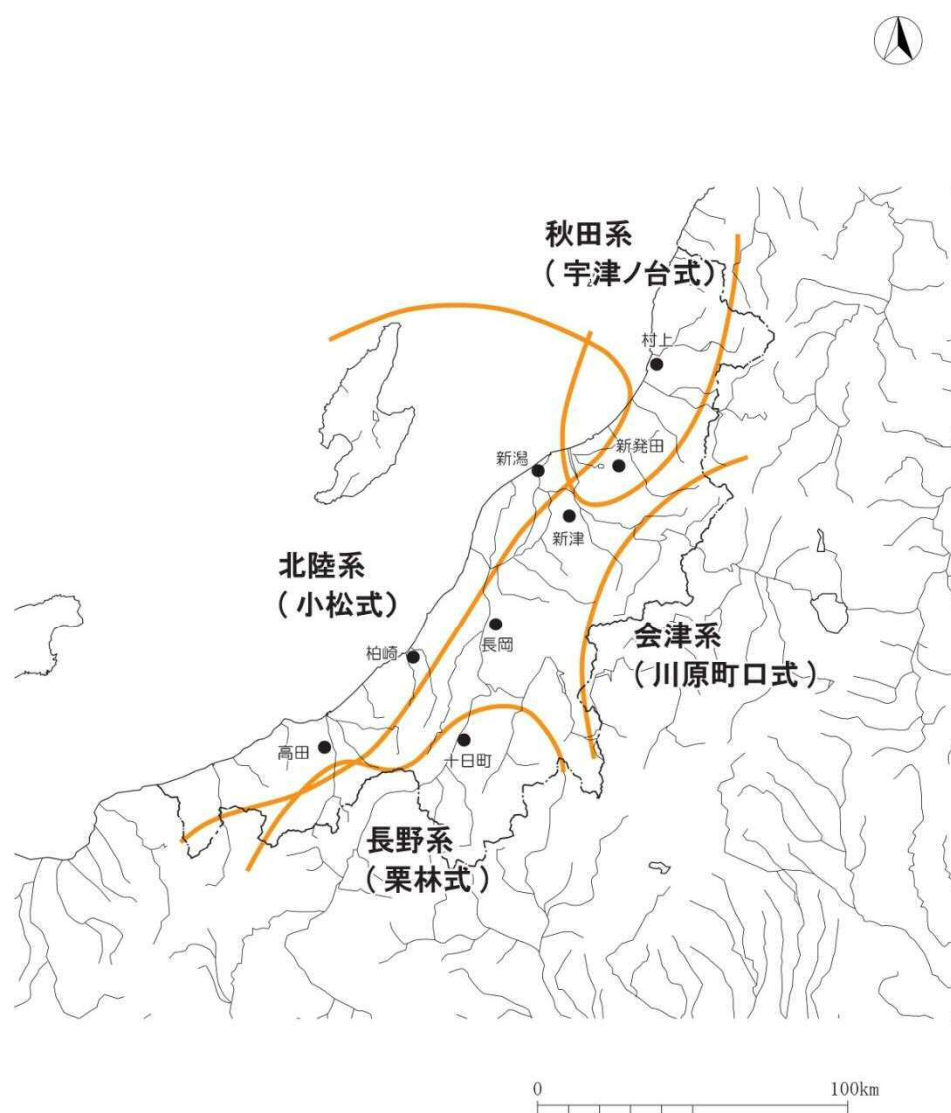
新発田市教育委員会
胎内市教育委員会
（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
村上市教育委員会
（五十音順）

お知らせ

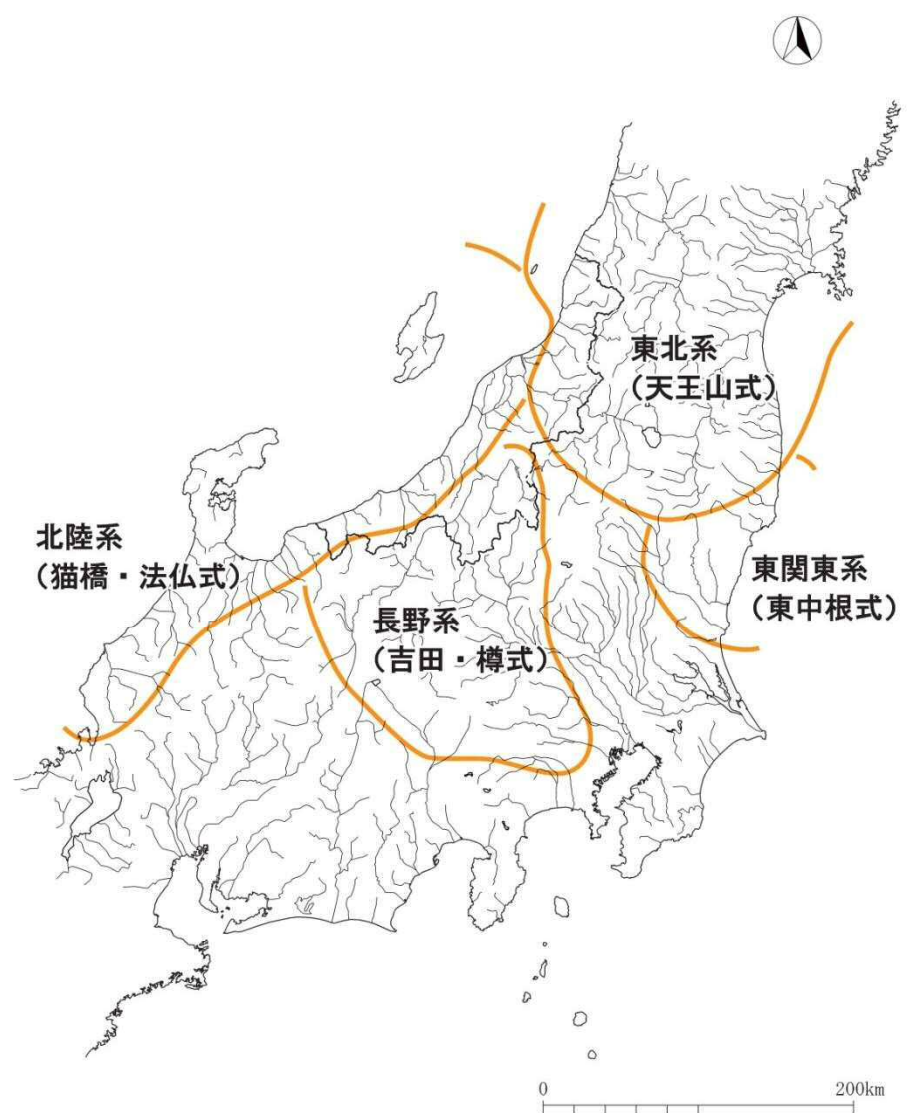
**講演会 「古津八幡山から見た卑弥呼の時代の阿賀北
—いろいろわかってきた弥生時代後期の新潟北部—」**

講 師 野田 豊文氏（村上市教育委員会）
日 時 2016 年 3 月 6 日（日）13：30～15：30
会 場 新潟市新津美術館レクチャールーム
定 員 80 名（無料）
申込み 不要（直接会場へお越しください）

文化財センター学芸員による展示解説
日 時 2016 年 1 月 24 日（日）13：30～15：30
申込み 不要（直接展示会場へお越しください）



弥生時代中期後半の土器別分布

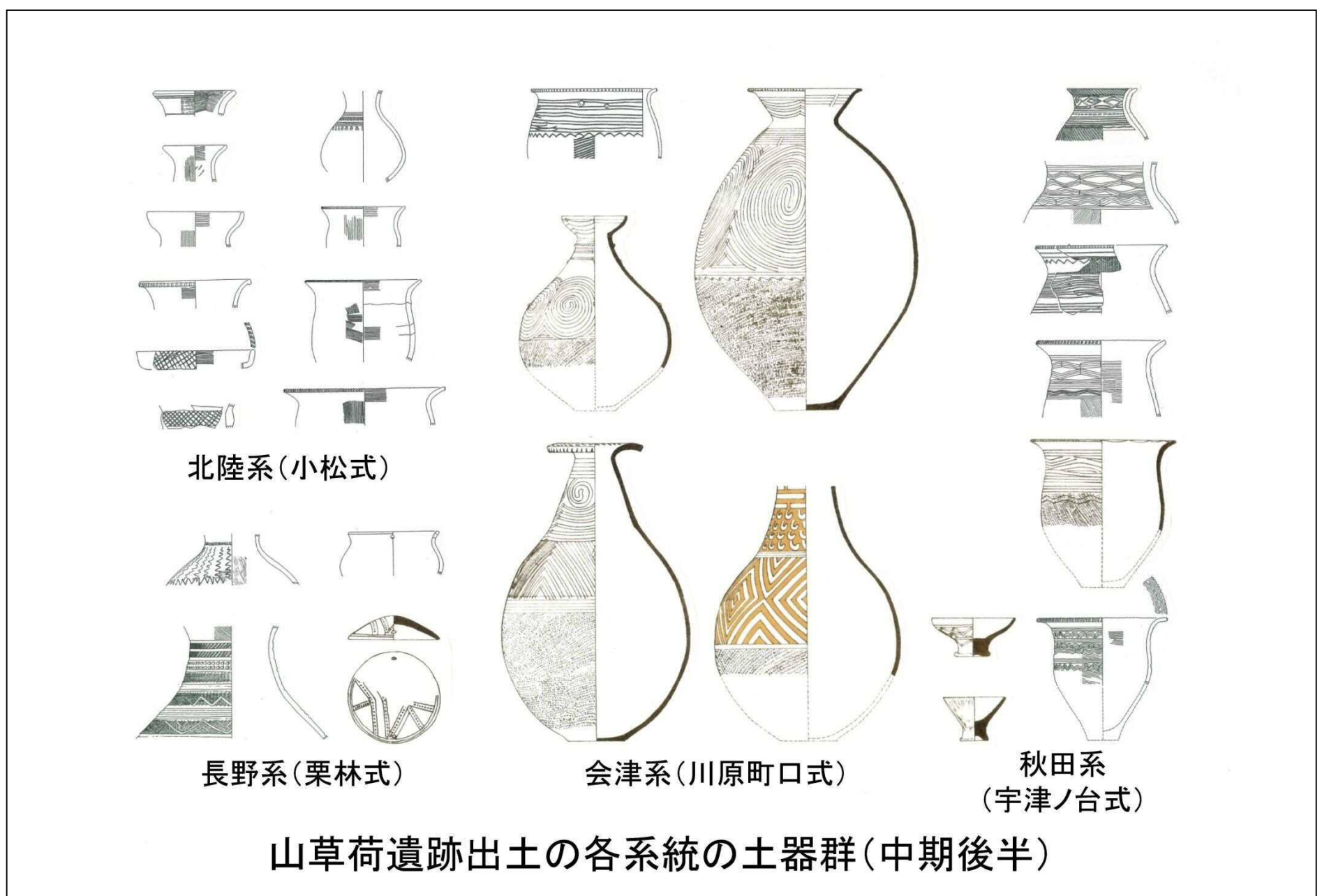


弥生時代後期前半の土器別分布

古津八幡山遺跡と周辺遺跡の関係

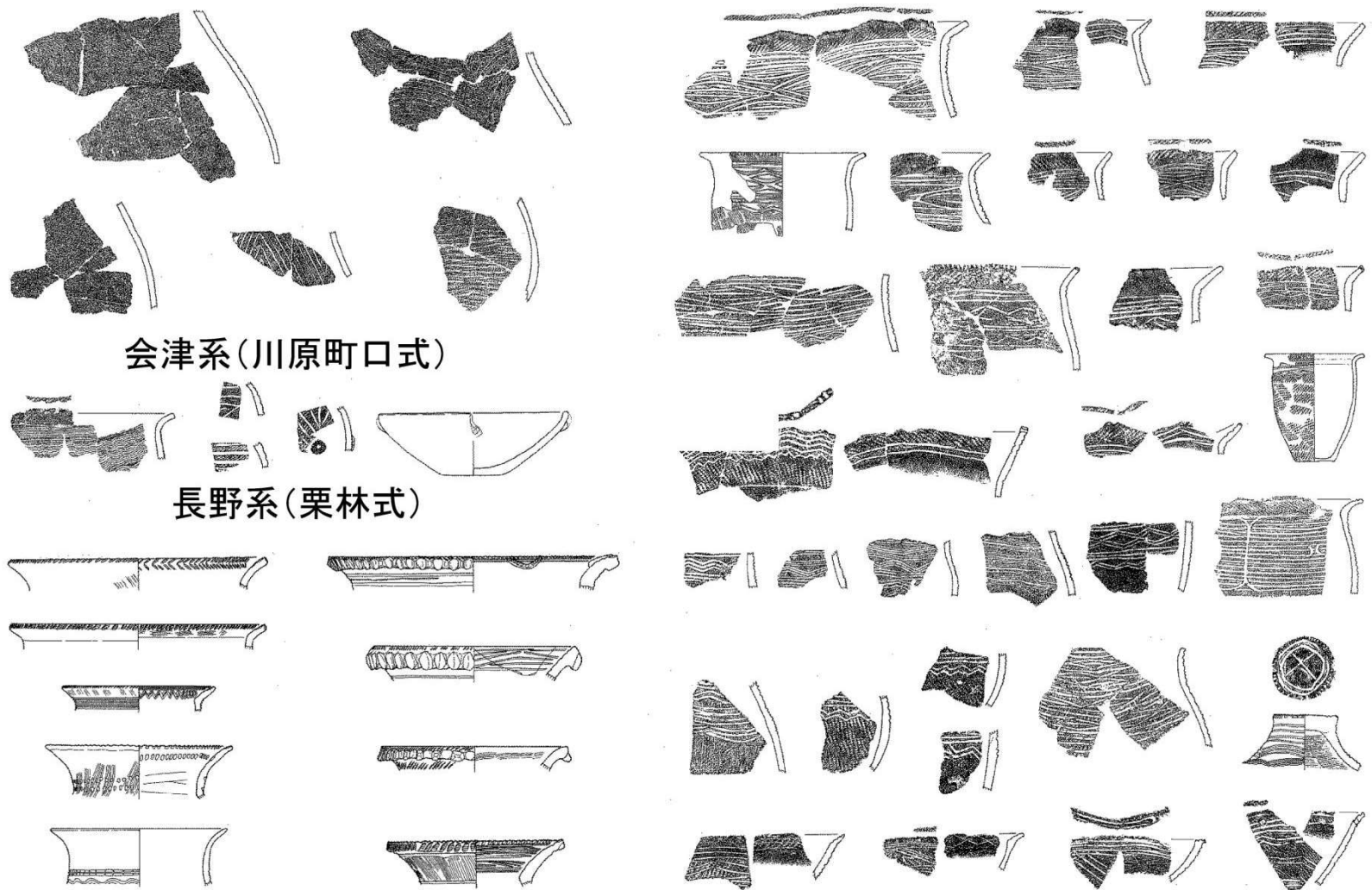
東北南部			新潟北部		古津八幡山遺跡							北陸南西部		
弥生時代中期	福島県		桜町遺跡	砂山遺跡・滝ノ前遺跡	土器型式	時期	北陸系			東北系	地元系		土器型式	
	中通り	会津	土器型式				環濠	竪穴住居	墓					
		二ツ釜式												
		川原町口式												
				1・2群	山草荷式		—	—	—	—		小松 専光寺 戸水B		
弥生時代後期	天王山	和泉		3群	砂山1式	O期				S103S20		1群	V-1群	
		能登	4群	砂山2式	1期									
	明戸	屋敷	桜町1式	滝ノ前2・3群	2期	3・4期	環濠の掘削	周溝を持つ隅丸方形住居	四隅が切れる方形周溝墓	S103S02・S103S21・S103N02・SX1006	S10602・SD03S25覆土中下層	2群	2-1群	法仏式
			桜町2式										3群	
										前方後方形周溝墓？	S10705		4群	白江式
古墳早期	稻荷塚遺跡1号竪穴住居 宮東遺跡1号土坑 館ノ内遺跡周溝墓 家西遺跡周溝墓 稻荷塚遺跡周溝墓 男壇遺跡周溝墓 宮東遺跡周溝墓		桜町3式			5期	沖積地の集落出現			居村DSKY1		5群		
古墳前期													6群	古南クルビ式 高島式
												7群		
												8群		
												9群		
													10群	
古津八幡山古墳↓														

※ 赤字の通称名・通称名は展示品



『弥生式土器集成 本編』 2 東京堂出版 1968・

『下谷内遺跡』 新潟県教育委員会 1979 をもとに作成



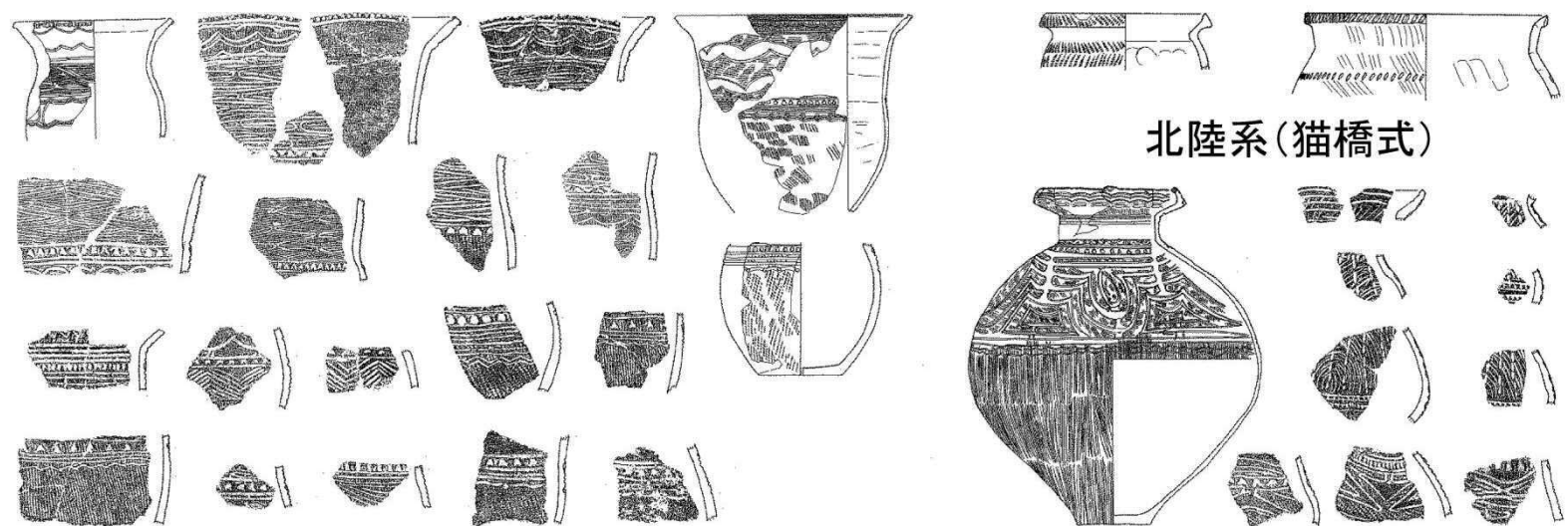
会津系(川原町口式)

長野系(栗林式)

北陸系(小松式系)

秋田系(宇津ノ台式系)

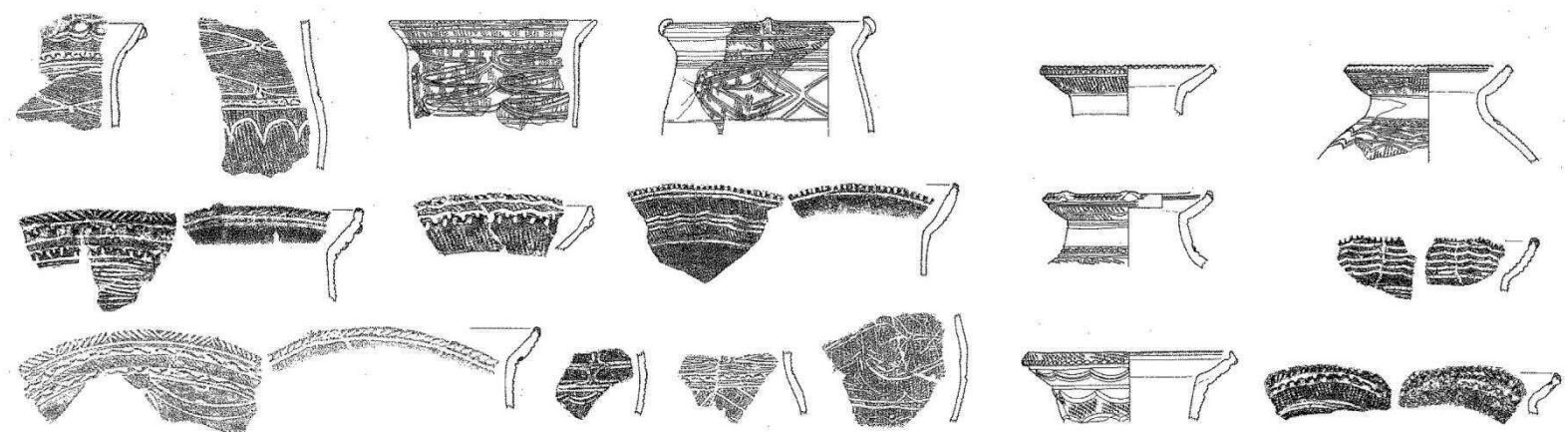
砂山遺跡出土の各系統の土器群(中期後半)



砂山1式(砂山3群)

北陸系(猫橋式)

台形状刺突



砂山2式(砂山4群)

交互刺突

砂山式土器の変遷(後期)

『三面川流域の考古学』第2号 奥三面を考える会 2003 をもとに作成

2016 年 1 月 5 日発行 新潟市文化財センター